

現代女性監督映画と女性文学の最前線

長谷川 啓

本稿は、2015年度の城西短期大学女性学講座「女性監督による映像作品とジェンダー」、及び紀尾井町ブッククラブ・「現代女性文学を読む」講座の報告である。

I 在日女性映画監督・呉美保監督の作品をめぐって

現代の映画監督には、河瀬直美（最近作「あん」）、荻上直子（「かもめ食堂」）、西川美和（「ゆれる」）、中村真夕（「ハリヨの夏」）、蛭川実花（「さくらん」）等、今や多数の才能豊かな女性たちが参入している。呉美保監督もその一人である。

呉美保は、1977年3月14日、三重県伊賀市生まれで、祖父母の時代に「朝鮮」から日本にきた在日三世である。子供の頃に両親が北朝鮮に渡ったため、祖父母に育てられた。祖父を撮った「ハラブジ」で大林宣彦監督主催の映画祭で審査員賞を受賞、祖母を撮った「ハルモニ」で東京国際ファンタスティック映画祭デジタルショート600秒にて最優秀賞を受賞している。2005年初の長編脚本「ヨモヤマブルース」でサンダンス・NHK国際映像作家賞を受賞し、翌年、改題した「酒井家のしあわせ」で映画監督としてデビュー、小説化した同作品により小説家としてもデビューする。2010年「オカンの嫁入り」で進藤兼人賞金賞を受賞、2014年「そのみにて光輝く」でモンリオール世界映画祭ワールド・コンペティション部門にて最優秀監督賞を受賞するなど国内外の各賞を受賞した。2015年には4作目となる「きみはいい子」を公開し、今後益々期待される監督である。

1. 「そのみにて光輝く」～底辺の人々へのまなざし

佐藤泰志の同名小説を映画化した「そのみにて光輝く」は、2014年の成果として、ブルーリボン賞はじめ8賞も受賞した作品。日本のバブル期における地方都市の底辺の人々を描いた原作が今なぜ映画化され共感を得るのか。「発表当時よりもむしろ現代にリンクする名もなき人間たちの心の叫びが封じ込められたような」小説が今人々の心を捉えつつあると、水上賢治は指摘する。

確かに、今年2月に起きた川崎での少年殺害事件は、シングルマザー家族の貧困をまざまざと

語るものだった。昼夜の二重労働・ダブルワークに追われ、不良仲間に誘われる息子に忠告する余裕すらない。恋人のような男を家に連れ込み、息子の居場所をなくしてしまうような行為も、経済的問題がからんでいたのかも知れないが、今やシングルマザーの貧困は貧困の最先端であるようだ（水無田気流『シングルマザーの貧困』、鈴木大介『ペットショップで108円のパンの耳を買う 貧困シングルマザーのリアルな食卓』『出会い系のシングルマザーたち 欲望と貧困のはざままで』『最貧困シングルマザー』）。そして貧困はセックスワークにつながる。

シングルマザーばかりではない。鈴木大介『最貧困女子』によれば、10代～20代女性を特に「貧困女子」と呼び、さらに、会社の倒産やリストラで再就職できず家族・地域・制度という三つの縁をなくしてセックスワークで日銭を稼ぐしかない単身女性を「最貧困女子」と呼んでいるという。家出・放浪する少女たちもセックスワークで生き延びているという現実のようだ。

子供の貧困化問題も浮上し、若者・高齢者の貧困も問題視されている。若者・青年もネットカフェ難民となりついにセックスワークにも就く。女性高齢者もグループを組み熟女売り出して売春し、逮捕されている。

戦争中の「従軍慰安婦」問題、戦後の米軍対象の娼婦、軍事基地周辺の歓楽街等からもみられるように、戦争と性は切り離せないが、貧困と性も結びついている。そして、戦争こそ貧困を利用するのである。

ともあれ、「そのみにて光輝く」こそ、貧困の中の女性の性の現実を抉り出した映像作品である。「酒井家のしあわせ」では再婚家族、「オカンの嫁入り」ではシングルマザー家族を描いてきた呉監督は、ここでは底辺の人々の家族の悲惨な状況に視点を据えている。

鉦山技師として発破をかけ山を切り崩している時に鉦夫を死なせてしまった達夫は、後悔から職を棄て自堕落な生活に逃避して生きている（綾野剛）。両親はすでに死に、妹夫婦も転勤して天涯孤独な身である。ある日、パチンコ屋で、前科があるけれども気のいい拓児（菅田将暉）と出会うが、物語はそこから始まり函館の街と海を舞台に展開する。拓児の家に行き、高度成長期に見捨てられたような掘っ立て小屋に住む家族たちに会う。父は痴呆老人となり、母はセックス介護に疲労困憊し、姉の千夏（池脇千鶴）は昼間は烏賊工場で働き夜はセックスワークの二重労働をして一家を支えている。千夏は拓児の上司（社長）で妻子ある男と関係ももっており、母に代わって父のセックス介護もやらざるをえない。

上記の記憶を消去できないままトラウマを抱えた達夫と、呪われたような不遇から抜け出せない千夏が、互いに救いを求めるように愛し合ってしまう。海の中での抱擁や浜辺での交合、達夫の部屋でのセックス等。達夫は、父のセックス介護も含めて丸ごと千夏を引き受けようと、託児を連れて鉦山で働き直そうと決意した時に、託児の傷害事件が起きる。千夏に復縁を迫りセックスを強要して暴力をふるう上司を刺したため、託児は自首し、鉦山に行けなくなるのだ。幾重にも不幸を背負った千夏は、貧困の根源である父の首を絞めようとして、達夫に止められる。

千夏を愛し、託児を可愛く思い、貧しい一家を救おうとした達夫の夢・願望は中断されそうになるが、終幕の場面、千夏が父の首を絞めようとして達夫に止められ、夏の浜辺に向かおうとする二人に朝日が射し光り輝く光景は、苦い悲しみながら、微かに再生の兆しがほのみえる。呉監督は「そのみにて〜」の「そこ」は「底」の意味もあるのではないかと、原作について言及している。

現実の過酷さをそのまま突き出さずに、一条の光で救済をこころみているところに、呉美保監督と高田亮脚本家の志が見受けられる。一貫して救いようのないほど暗い作品だが、こうした現実をも抱えた今日の社会へのメッセージが伝わってくる秀作である。貧困が女性に強いるもの、性の奴隷化をあらためて痛感させてくれる。

在日女性映画監督だからこそ、暗さを凝視し描き得たのかも知れない。

原作、佐藤泰志の「そのみにて光輝く」(『文藝』1985・11。河出書房新社1989・3、後編の書き下ろし「滴る陽のしずくにも」も併録)についても触れておこう。

作者は1949年4月26日に生まれ、1990年10月10日に死亡した小説家である。北海道函館市高砂町出身。函館西高等学校在学中の1966年に「青春の記憶」で有島青少年文芸賞を受賞。翌年、高校で起こった防衛大学校入学説明会阻止闘争を題材とした「市街戦のジャズメン」で同賞優秀賞を受賞したが、その内容から受賞作品が通常掲載される北海道新聞に掲載されず、同人誌『北方文芸』に掲載された。

自殺して死後絶版となっていたが、2007年、17年経ってから再評価が進み、「海炭市叙景」「そのみにて光輝く」「オーバー・フェンス」(2016年公開予定)が映画化。本作品は2015年に舞台化もされている。

作品は、第1部と第2部からなっている。映画では第1部を主として、第2部の託児殺傷事件や鉱山行き計画が組み込まれている。達夫はそもそも造船会社に勤めていたが、裼首反対のストライキ中の組合のあり方に疑問を抱き、退職している。千夏も一度結婚して前夫につきまとわれている。第2部では達夫と千夏は結婚して女の子まで生まれている。千夏の父も死亡し、母親は託児とともに相変わらずバラック小屋のような家に住むことにこだわり(市政のままに高層建築に移転することを拒否)、託児は時々東京にまで出稼ぎに行ったりしている。達夫は海産物問屋のような会社で働き魚の匂いにまみれている。家庭におさまらず、鉱山主に誘われるまま、託児を連れて山行きを決意する。鉱山主の元妻と一夜の浮気もしたりするが、しかし、母親と妻と娘を見捨てず、留守中、彼女らが一緒に住む算段もし、家族の姿を確認して終わっている。

全編、辛口の社会批評、世間批判が散見。死んだ後まで背番号をつけられた人間社会を痛烈に剔っている。千夏に、「警察なんかには、とことん楯をついてやるわ。あんたなんかに、あたしらのことなんてわかりっこないわ」と達夫に向けて言わせてもいる。肝の据わった女たちと、夢追いを棄てきれない男たちを対照的に表出している。

映画は第1部の苦しくも切ない愛に絞り、底辺へのまなざしを鮮烈化した。

2. 「きみはいい子」～虐待・苛め・認知症の表象

一貫して家族像を見詰めてきた監督だが、今度はさまざまな家族を通して現代の課題、子供虐待、子供間の苛め、独居老人の認知症の始まりを描いている。原作・中脇初枝の5編からなる短編小説集『きみはいい子』（2012・5 ポプラ社）の中から、「サンタさんの来ない家」「べっぴんさん」「こんにちは、さようなら」の3編を選んで映画化している。すべて、富士山が見え、元桜の大木があった小学校のある町で起こっている話である。短編連作としてではなく、同じ町で同時に起きている出来事として描き、今、町で、社会でどのようなことが生じているかが見詰められ、観る者にまっすぐ問いかけてくる一作品となっている。原作の意図がそのまま反映されている。辛い話だけれども、確かに「ささやかな『しあわせ』を描く再生と希望の物語」だ。

わかりやすくするために、あえて原作と映画を混同して述べると、「サンタさんの来ない家」は小学校の新任教師・岡野匡（高良健吾）が学級崩壊まで起こしながらも、苛められっ子や苛めっ子たちに、家族から「抱きしめられてくること」という宿題を出して、何とかくいどめる話だ。そして、母親が働き、働かない養父が子供を虐待して暴力をふるい、満足に食べられないばかりか夕方まで帰宅も許されず、自分は悪い子だからサンタクロースもやって来ないと思ひこむ少年を、その新任教師が何とか救おうと前向きになるラストシーンが希望をつなぐ映画となっている。

「べっぴんさん」こそ、さらに辛い話だ。養父の少年虐待から、実母の幼女虐待の話である。その若い母親は同じく実母から虐待された記憶から逃れられず、娘のちょっとした失敗を怒って虐待し続けるという暴力の連鎖。夫は心優しいが海外に出張中である。若い母親の実母はシングルマザーで、夜の仕事をし余裕のない生活をしていたという。その若い母の家族と同じマンションに住み、公園デビューの仲間でもある二児の母も自分の父親から虐待を受け、その度に、近所に住む在日韓国人のおばあさん（独居老人で、最後は海で自殺）に助けられたという。おばあさんに抱きしめられ助けられた経験が、我が子を虐待するという暴力の連鎖から救い、幼女を虐待し続ける女友達を抱きしめて心を鎮めてあげる。微かだけれども、希望の光が見えてくる。

「こんにちは、さようなら」は、戦争中の記憶を忘れない（女学校の時に学徒動員され、焼夷弾による空襲によって弟が死ぬ経験等々）孤独な高齢女性が認知症になりかかり、スーパーでレジの支払いも失念しまいがちになるが、その老人と障害をもつ少年との心温まる交流の話だ。その少年の母親は、子供が障害をもつとわかって家を出て行った夫と別れ、スーパーで働きながら少年を育てているが、時には辛さからトイレに我が子を閉じこめ食事も与えない虐待もしたことがあるという。少年に合わせとは何かと問うと、「しあわせは、晩ごはんを食べておふろに入ってふとんに入っておかあさんにおやすみを言ってもらうときの気持です」と答える。ささ

やかな仕合わせ、いのちの大切さを再確認させてくれる物語となっている。この後、一人家族と「母子家庭」には交流が始まることを予感させて終わっている。

戦争法も通り戦争の危機に直面した現代、原爆や原発など核社会となって地球破壊に陥った現代、いのちの問題、生き物の生存自体が脅かされている現代だからこそ、「ささやかな仕合わせ」の発見を再度確認する本作品の意義は深いと思われる。

淫靡なレイシズム社会で生きてきた在日女性だからこそ、人間の当たり前な生活が今脅かされている現実を映像化しえたのではなかろうか。そして、私たちに問いかけているのではなかろうか。映像制作の初期から、祖父や祖母を映像化するなど、生活に密着した作品を撮り続けてきた監督であった。

II 現代女性文学の最前線

1. 戦後社会への問いかけ——赤坂真理『東京プリズン』

まず、作家の経歴を簡単に辿ろう。

赤坂真理は、1964年5月13日に東京都杉並区高円寺に生まれた。慶應大学の法学部政治学科を卒業後、ボンテージと思想の雑誌「SALE2（セール・セカンド）」の編集長をつとめている。

1995年、「起爆者」で小説家デビュー。1997年、初の書き下ろし長編『蝶の皮膚の下』を刊行。1999年に『ヴァイブレータ』が第120回芥川賞候補となり、2003年に廣木隆一監督・寺島しのぶ主演で映画化され、釜山映画祭で優勝（同じく日本映画「チルソクの夏」が2等を獲得）。2000年に『ミューズ』が第122回芥川賞候補、第22回野間文藝新人賞を受賞、2008年には『太陽の涙』を刊行している。2012年に『東京プリズン』により毎日出版文化賞、司馬遼太郎賞を受賞、2013年に紫式部文学賞を受賞した。2014年に評論集『愛と暴力の戦後とその後』を刊行、2015年に内田樹・高橋源一郎らと共著『日本の反知性主義』を刊行する。2015年には「大津波のあと」（3・11以後の原発問題に取り組む）を『新潮』10月号に発表するなど、批判精神旺盛な骨太な作家で、最近は民主主義作家といわれているようだ。アメリカ留学体験での挫折感や、政治学科卒業等と関わっているように思われる。

本題の作品に入る前に、話題になった「ヴァイブレータ」にも触れておこう。『群像』1998年12月号に掲載され、1999年に講談社より刊行された作品である。

心の病（食べ吐きを繰り返す。小林富久子氏によれば摂食障害）に陥った女性が遠距離輸送するトラックの運転手と行きずりに出会い、遠距離往復のトラック中でのセックスを通して、人間的触れあいが心の癒しとなり、心の恢復に繋がる過程を描く。学校教育や教育ママの躰等、窒息するような拘束状況に苦しみ、心の病に陥っているが、学校制度批判や母親殺し（精神的意味）、

母と娘の物語となっている。

本題の『東京プリズン』は、『文藝』の2010年春号から翌々年の夏号に連載され、2012年7月に河出書房新社から刊行された。

『ヴァイブレータ』が「私」の心の痛みの深層を掘り下げたとしたら、『東京プリズン』は戦後日本の痛みの深層を採った作品といえよう。『ヴァイブレータ』が母親殺し（母への反発）なら『東京プリズン』は母親探し（母を理解する）の物語でもある。いずれも自分のトラウマに向き合っているが、後者はことに戦後日本の出発に遡ってその原点を見つめ、書かれるべくして書かれた作品だ。

タイトルが「巢鴨プリズン」を連想させるように、東京裁判、とくに天皇の戦争責任問題を焦点に据え、忘却されてきた戦後の歴史を掘り起こした画期的長編小説で、戦後70年の今日読むのにふさわしい。日本の少女のアメリカへの留学体験を通して、日本とアメリカの対等ならぬ歪んだ関係を問い、戦後日本を問い、アメリカをも問うた大作。3・11まで視野に入れて戦後日本を考え、近代日本を問い直している。

作者は「戦争と戦後、そしてそれが私たちに今も落としていることを考える小説です。私の個人的な体験が核となっているけれど、フィクションで、『セルフ・フィクション』とか呼んできた」と「赤坂真理のウェブログ」（2012年1月18日）に記している。『愛と暴力の戦後とその後』では、「私は十五、六歳で、（中略）無数の切り傷をつけられるように体と心にある刻印がなされた。」「『東京プリズン』という小説は、私が十五、六歳から抱えることになった鬱屈を、象徴的に書いてみようとしたフィクションである」と書かれている。「日本の『戦後』とは、多かれ少なかれ、アメリカとの関係をめぐって揺れてきた時代のことである（『日本経済』がよかったとき）というのは、『世界におけるアメリカ人勝ちの時代』だった）」「アメリカとの関係は、黒船のはじめから、『市場開放』と『不平等条約』が、『武力』を背景にやってきた」が、第二次大戦後も現在（米軍基地、TPP等々）も変わらないこと。残酷さと親切さの両面を孕むアメリカの占領期以来（日本は「おもてなし」で対応）、ジョン・ダワーが『敗北を抱きしめて』で匂わせているように、二国のどちらも、関係性に性的ニュアンス（性交の含みさえある）を感じると述べているのである。

以上のことは、『東京プリズン』を読み解く鍵といえよう。現実とファンタジーが交錯し、幻想場面がメタファになっているが、例えば少女マリがアメリカの少年から少年の車の中で強姦されかかるところ、又、マリの母親が東京裁判のBC級の翻訳下請けの仕事をし、さらにマジックホールで速記の仕事の関係で訪ねたアメリカの将校に抱かれて陶酔感を味合うところなどに、アメリカと日本の性的な関係が象徴化されているように思う。

小説の最初の方で、宮崎駿の「もののけ姫」に出てくる森の王者にも似たヘラジカがアメリカ少年たちの狩りで撃たれるが、そのヘラジカの様は日本の天皇が戦争責任を問われることを暗示

しているように思う。天皇をアニミズム化して、その化身としてのヘラジカと撃たれる前に目を見つめ合い、撃たれた後も見つめ合って、マリに意志を託している（子鹿の耳が地に埋められるのは自分自身か）。それが最後の天皇自身の戦争責任についての発言につながっているともいえる（「大君」こそ天皇だが）。『東京プリズン』は、天皇の戦争責任をめぐる最終章がテーマで、それ以前の東京やアメリカでの過去や現実、幻想シーンの交錯した表現はテーマへの布石といていい。判読しづらいが、巧妙に仕掛けられた装置がほどこされている。

『東京裁判ハンドブック』（東京裁判ハンドブック編集委員会編 青木書店 1989・8）に「東京裁判ではアメリカの意思が強く反映された。このため裁判はアメリカの占領政策の一環という色彩を濃くし、たとえば、アメリカの高度な政治的判断によって、最高の戦争責任者とみなされていた天皇裕仁は不起訴となった」とあるが、その不問に付された天皇の戦争責任を追及して見たのが本作である。

又、本作1・2章の開始前に「私の家には、何か隠されたことがある。そう思っていた」とあるが、それは「家」と同時に日本という国の秘密を探索する旅であり、不問に付されてきた天皇の戦争責任と重なる。電話口で母を呼び寄せ、成人した自らが母となり、少女時代の自分に向き合うのも、そのためである。少女の現在と自分史（家も含めて）とファンタジー（神話も含めて）を交錯させるなど総動員して、戦後日本の実態（戦後史）と日本とアメリカの関係を探るころみといえよう。自己探求がそのまま日本の探究となっているのである。敗戦という事実さえ隠すように、忘却して今日にまで至った歪みの原点は何か。それは天皇の戦争責任を不問に付すことを基点として、「自分の過ちを見たくないあまりに、他人の過ちにまで目をつぶってしまったこと」だと語り手はいう。戦争中のアジア侵略や多くの同胞の死を招いた戦争責任と、戦後のアメリカ追従により日本の被爆やベトナム戦争の非をアメリカに問うこともできず現在まできていることである。それが日本の本当の意味での敗北なのだと言及している。日本の戦後批判も痛烈だが、インディアンからの土地収奪、ベトナム戦争の枯れ葉剤作戦、日本への原爆投下、キリスト一神教のこと等々アメリカ批判も痛烈になされている。アメリカの懐の広い民主主義は高く評価しているけれども。

16歳の少女マリがアメリカの高校に留学して言語差や性差、生活・文化の相違に躓き孤独な生活を続けた末に、ディベートの授業で「日本の天皇には第二次世界大戦の戦争責任がある」というテーマを担当させられ、「私は、日本の天皇ヒロヒトを、第二次世界大戦の戦争犯罪人であると考えます」という立場に立たされる。そして「私の存在は罪深い。私は有罪である」「彼ら（日本政府・軍人・国民―筆者注）の罪は私の罪である」という天皇の声を聞く。探究の旅の原点に辿り着いたことになる。赤坂真理は、日本人が隠している、忘却している戦後の歴史の原点を見据え向き合おうとしたのだ。本作の核心的部分である。そのためには、東京裁判をもう一度やり直す必要があった。ディベートの場を借りた模擬裁判で。

母の問題についても問うている。なぜ、娘の自分をアメリカの北方メイン州の高校に留学させたのか。東京裁判の翻訳の下請けをした経験を過去にもち、通訳の仕事もしてきた母なのに、「くそ米軍」ともいっている。戦後のアメリカ属国の現実の矛盾を知るからこそ、娘のマリを日本の「外部」に行かせ、希望を見つけ出してもらって、自分自身も救われたかったのではないかと。しかし娘は挫折して傷を負い虚無を抱えて生きている根無し草になる。だが老母に連れ添いながら、マリはかすかな希望も抱いていく。

『東京プリズン』後の歩みが「大津波のあと」である。3・11後のフクシマに行き、外国人労働者が福島原発で働き、廃炉のプールにも潜る危険な仕事をしていることを知り、身体も家族をも引き裂く原発への恐怖を見詰め続ける男を描く。だがやがて、現地での土着的な祭りやアニミズム（森羅万象）の世界に、人と人とのつながりの中に生きる希望を抱いていく男だ。大人の男が少年に惹かれていく光景も描きとめられている。

2. 記憶の伝承——津島佑子「葦船、飛んだ」にみる〈疎開・引揚〉

赤坂真理の「東京プリズン」に続き津島佑子の「葦船、飛んだ」は、次章で取り上げる金原ひとみ「持たざる者」や林京子の原爆文学とともに、戦後70年の日本を考えるうえで欠かせない、核心的テーマを扱った必読作品である。

今年の2月18日、津島は肺癌にて68歳で永眠し、大変大きな作家を喪った。哀悼の意を込めて、簡単ではあるが経歴を辿ってみよう。

1947年3月30日に東京都北多摩郡三鷹で生まれた、太宰治の娘である。1歳の時に父親が愛人と入水心中し、13歳の時にダウン症の兄が死亡した経験は、彼女の心に深い翳りを残した。それは書くことでしか救われないほどのものであったろう。いわゆる全共闘世代で、大学院にも進んだが通学せず、1969年に「青空」「粒子」を発表するなど創作行為に入っている。翌年就職するが結婚のため退職。二児を得、離婚に至るが、その間ずっと小説を発表しつづけ、1976年には作品集『葎の母』で田村俊子賞を受賞している。翌年も作品集『草の臥所』で泉鏡花文学賞、翌々年『寵児』で女流文学賞を受賞。79年にも短編連作集『光の領分』で野間文芸新人賞、83年「黙市」で川端康成賞を受賞するなど、賞続きであった。そして80年に「山を走る女」を連載、83年に書き下ろし長編『火の河のほとり』を刊行するという活躍ぶりであった。だが、84年に息子を亡くし、救いを求めるようにレクイエム『夜の光に追われて』を連載し、翌々年に読売文学賞を受賞。同じく息子を描写した「真昼へ」で89年に平林たい子賞を受賞している。

90年以降は、母親殺しと母親探しの物語・母と娘の物語『風よ、空駆ける風よ』で95年に伊藤整文学賞、自分の母親のことを描きテレビドラマにもなった『火の山—山猿記』では98年に谷崎潤一郎賞と野間文芸賞を受賞。さらに『笑いオオカミ』で2001年に大佛次郎賞、『ナラ・レポート』で2004年に芸術選奨文部科学大臣賞・紫式部文学賞、『黄金の夢の歌』でも2010年に

毎日芸術賞を受賞している。『葦船、飛んだ』は2011年に、『ヤマネコ・ドーム』は2013年に刊行。13年に肺癌が発覚して治療中だったにもかかわらず、昨年1月から8月にかけて「ジャッカ・ドフニー 海の記憶の物語」を連載していた。次第にアジアへの関心が深くなり、晩年までまさに書き続けた、日本ばかりかアジアを代表する現代女性作家であった。

さらにいえば、津島は1970年代後半から80年代のフェミニズム最盛期にかけて、産む性の復権（近代主義的なフェミニズムを超えて）シングルマザーの光景を表出した。「光の領分」「山を走る女」「黙市」等々。いわゆる「母性神話」から逸脱した、幼児を連れて男とも逢ひ引きし、育児をしながら愛も性も棄てない女たちの表象化である。孤独で過激な女たちの像であった。当時のフェミニズム文学の旗手であったといえよう。産む女の性を基点とするアジアへの視野の広がり、近代を越境する津島の思想と文学がうかがえる。

(1) 「葦船、飛んだ」のテーマ・内容

今回のタイトル・テーマを「記憶の伝承」としたが、より具体的にいえば、記憶の深層に刻まれながらも忘却されてきた「日本の敗戦前後の記憶の封印をとく物語」を、広く読者に伝えようとした作品といえる。敗戦後それなりに再生していったものの、戦争による傷痕を心身の奥底に引きずって生きてきた人々の隠蔽された記憶を、次世代が探りあて掘り起こし、受け止め伝承していくが、戦争にまつわる被害（加害も）の実態を暴く反戦小説ともなっている。

日本の敗戦時における植民地「満州」からの引揚者が負った傷痕が見詰められ、学童集団疎開やアメリカの占領下のもとに閉校になったり開校されたりした小学校の歴史にも触れられている。戦後60年以上過ぎた現在時と戦争の時代や敗戦後状況を交錯させ、過去の記憶が現在と結びつく仕掛け（構造）になっている。とくに、満州引揚げ時にレイプされた女性の妊娠と、現代のアメリカでレイプされた女性の妊娠の問題が重ねられ、今なお抱え込まざるをえない女性の問題すなわち男性中心世界の問題が取り上げられているのである。

2009年4月1日から翌年の5月15日まで『毎日新聞』に連載、2011年1月に毎日新聞社から刊行された大長編。世界的に戦争の記憶が掘り起こされ、ポストコロニアルな視点が導入されて植民地研究が再燃し、近代日本の戦争を問う作業も再燃した潮流の中で書かれた小説とえよう。

作品は、まず中心人物の道子がスズメバチに射されて急死し、小学校時代に同じクラスだった雪彦が通夜に駆けつけるところから始まる。道子は小学校で同じクラスで優等生同士だった達夫と結婚していたが、突然妻を亡くして茫然自失している達夫にかわって、妹の理恵が兄夫婦の同級生の笑子に義姉の死を伝え、笑子から同級生の昭子や雪彦に伝えられる。記憶の再現には、過去を振り返る通夜の葬儀という装置が最適だ。作中、「道子の訃報はスズメバチの羽音となってひろがる」とあるように、なぜスズメバチによる死が選択されているかが了解される。急死の伝播力は、卒業後のクラス会以来50年も会っていなかった旧友たちを呼び寄せ、再会させる。そ

して道子を偲ぶ会では小学校時代の記憶を蘇らせる。自分たちが登校し卒業した小学校は、集団疎開させられた児童のために開校されたという小学校の歴史にまで遡っているうちに、敗戦後の東京の街や生活（男の子はまだ戦争ごっこをしていた）をそれぞれに思い起こさせる。道子や達夫、道子の親友である笑子、級友の雪彦や昭子は60歳過ぎとあるが、1947生まれの津島佑子自身と重なり、戦後生まれながら戦争の影を負った貧しい時代を共有している仲間たちであった。父親が復員してベビーブームとなった団塊の世代である。

母校の小学校の歴史に関する報告メールを雪彦が送信したことから、級友たちの記憶の掘り起こしは次第に開始されていく。体が小さくて優しく途中から消えていったヒロシくんは引揚者ではなかったかという記憶の探索から、満州を基点として、戦中・引揚げ・敗戦後に関わるそれぞれの記憶の深層への旅が始まり、忘却されていた過去が浮かび上がってくる。以下に、各親世代の戦争の傷跡をみてみよう。

離婚してシングルマザーとなり再婚後又離婚の決意に踏み切った昭子はインテリアデザイナーの仕事をしているが、実家の父親は元傭職人だった。その父が戦争中シンガポールで片腕になり負傷兵として復員してきてから性格が変わり、鬱屈した戦後を生きざるをえなかったのだった。雪彦の老母は語られぬ秘密の過去をもっていた。かつて母の親友だった娘が満州に働きに行き、引揚げ途上で朝鮮人ゲリラ兵らしき男たちやソ連兵（ヤルタ会談によって参戦、満州に進駐）に強姦された上に「ロスケ」相手の娼婦となり、脱走中に妊娠していたことがわかるがそのまま引揚げ船に乗り、佐世保に帰国できたけれども事情がわからぬまま国の政策により「不法妊娠」にされ（外国人など人種の違う者から受けた性病は悪質であるため、今後亡国病となる危険があると徹底検査したという）強制的に中絶させられ（髪・肌・目の色が違う子の出産を禁止してそのまま故郷に戻せぬためもあったかも知れない）、憔悴しきって北国の故郷・新潟に舞い戻り昭子の母を訪ねてきたのだった。

笑子の両親は満州からの引揚者で、母親は中国人の孤児（戦争孤児か）で、大連のユダヤ系貿易商のロシア人の家に住み込み台所で働く中国人女性に育てられ、娘になってからハルピンに住む日本人の金持ちの家の女中として働く。その家の長男のお手つきとなり身籠もるが、出兵した長男は戦死。奥様に可愛がられ出産するも、日本の負け戦によって家も奥様も爆撃されてしまう。この家に同居していた元軍属の測量技師と一緒に逃げ延びながら結婚。途中で死んだ幼児を氷上に置き（氷地なので掘って埋めることができなかった）、再度妊娠しながらもようやく引揚げ船で帰国する。危うく中絶を強制する魔の手から夫に救われながら。そして生まれたのが日中混血の笑子である。小学校当時、笑子は級友たちに秘していたけれども。

道子の父親は医者で、満州のハルピンで医師として働いていた経験を持つ。その父の体験話が少女時代の道子のハルピンへの憧憬（満州からの引揚者だという優しいヒロシくんの記憶と重なるからでもある）となり、やがて夫・達夫の出張先ニューヨーク（日本の大手家電メーカーに勤

務。定年後の現在もその下請け会社で働き続けている）で出会った白系ロシア人からシャンデリアの飾りであった青い硝子細工をもらう。そのロシア人はハルピン育ちで、ロシア革命時にハルピンに亡命した父母をもち、日本の敗戦後、ソ連によって兄と姉をシベリアに抑留され、次兄と妹とともに命からがらニューヨークに行かざるをえなかった男性で、道子と心惹かれ合う（それも原因の一つか、帰国してから達夫との夫婦仲も悪くなり、やがて寝室も別になる。達夫は仕事人間でもあった）。その硝子細工の謎を解いていくことがこの小説の鍵ともなっている。日中混血少女だった笑子は、中国人の母から大切にしていた子馬の細工物（奥様から買って貰ったハルピンの記憶の証し）を形見に貰っていたが、自分の出生の秘密を握るその子馬細工と、人妻の道子の隠された恋を語るような秘密の硝子細工を、笑子と道子は交換する。親友同士の証のような秘密の交換である。

達夫と道子夫婦の息子と娘は帰国子女となって日本になじめずに、現在ニューヨークに住んでいる。兄の方の息子・清太郎は子連れのエジプト系アメリカ人・カリマと同居し、妻となったその女性は妊娠中である。妹の奈美はニューヨークでレイプされ、別れたボーイフレンドがからんでいて正式に起訴もためらっているうちに妊娠に気づく。産むか産まぬか悩み続ける。日本に滞在していた高校生の時に自殺未遂したこともあるので、道子亡き後の達夫も困惑し、達夫の妹の理恵（廃校となった小学校の後輩）は、カリマの女友達がレイプされて産まれた子供を堂々と育てている話に感動し、姪にはひそかに産んで欲しいと願っている。理恵自身はシングルで美人でキャリアウーマンのしっかり者で、妻亡き後の兄が住む実家に移って兄を支え、姪の心配にあげくれている。やがて退職し、道子のボランティアの仕事（国際養子の問題を支援する）を受け継いだ笑子を手伝いながら、自分のマンションの部屋を貸しギャラリーにして収入を得ている。

昭子の一人息子・哲は母親の再婚が原因してか34歳になってもニートのような生活（第五福竜丸・イージス艦事件も批判する文明批評家の高等遊民）をおくっていたが、母の友達で離婚した笑子が実家に戻って老父の介護をしているのを手伝っているうちに、理恵の貸しギャラリーの仕事まで手伝い、雪彦から始まり理恵・笑子・昭子・達夫の間で交換されるメール報告にも参加して、戦争の記憶の掘り起こしの担い手になっていく。この、親の回想や自分たちの記憶の再現から始まった調査は、子供たちをも巻き込んでいく。大連での民間人（記憶の貯蔵庫である高齢の老婆など）からの聞き取り調査（戦中・敗戦時の日本人の状態）は、現在、大連に支社のある日本旅行会社に勤務する雪彦の娘・青葉が担当、報告している。大連は引揚げ船が出港する、雪彦の母の友人が被害に遭った因縁の場所でもあった。

ニューヨーク在住の白系ロシア人（道子の心の友）からは、ハルピンにおける戦中・敗戦時の状態を、達夫夫婦の娘が聞き取るなど、しだいに家族も参加して記録冊子にまとめられていく。記憶の糸をたぐり寄せ、親から子へ、孫へと伝えていく、伝承の物語だ。以前のベトナム戦争やガザ・イラク・アフガニスタンでの現代の戦争も織り交ぜながら語られ、「戦争とは、結局、い

つも同じ理屈で始まり、同じ痛みで終わる」「いつもいつも戦争だらけ」、「日本敗戦の年は核兵器の始まりでもあ」と核時代の今日をも撃ち、「人間の武器は『進化』し続け、それを売り買いする人も消えはしない」と、根底的な戦争批判を理恵の報告メールを通して展開している。

この作品は、そうした戦争傷痕の記録にとどまらない。敗戦前後の調査報告メールを縦軸に、報告者たちのそれぞれの人生を横軸にして、記録に参加する人たちが織りなす物語にもなっている。一人息子の雪彦は国鉄職員の父の死後、母親と二人暮らしだったが、やがて結婚。二人の娘をもったが、妹の方を幼児のうちに死なせ、喪失感に打ちのめされているうちにセクハラ嫌疑をかけられ、大きなホテルを退社。ついに離婚に至り、妻は子連れ再婚する。父の死後も結婚後もずっと母と一緒に暮らしていたマザコンの一人息子雪彦は、離婚をきっかけに母は別居して一人暮らしになるが、老母を介護するために同居せざるをえなくなる。やがて、孤独な雪彦としっかり者の理恵が惹かれ合うようになる（作品の冒頭、雪彦が再会した理恵を美しい人だと思うシーンは布石）。

又、妻の道子の死や恋めいた秘密の謎に打ちのめされる達夫と、老父を介護する笑子の寄り添い合う気持。カップル形成によるそれぞれの再生の姿も予感させる終幕だ。さらに、達夫の息子の嫁とレイプを受けた娘が妊娠し、兄嫁の出産による影響から、自分も産もうと決意して出産に至る娘。それぞれの再生の姿が、笑子の死の病につく老父の幻夢の中で暗示されている。「風よ、空駆ける風よ」の中で老母の黄泉路の世界で夢みられる光景を連想させる道行きである。その作品で輪廻転生の思想、老母の命が若い姪のお腹の中の子に転生されていくように、ここでも、笑子の老父の命は達夫の娘の赤ん坊に転生されて行くのかも知れない。たとえレイプによる産児であっても、いのちを産んで育み、いのちが受け継がれていく自然の恵みの尊さを確認させて終幕しているように思う。

以上、今述べたように、小学校の同級生とその家族たちが織りなす物語でもあり、それは戦争の記憶、傷痕を引きずって生きた人々を想い起こす装置ともなっている。引揚げ途上で死んだり置き去りにされた子供たちや、敗戦国ゆえに外国人兵士に強姦された日本の女性たち。白系ロシア人や中国人女性の悲劇的な運命。日本側の戦争被害ばかりが描かれているわけではない。全面的にはないが、日本人兵士の満州における暴力や強姦等の加害側面にも触れている。日本が収奪した満州の土地と人についてはそれほど触れてはいないが（日本軍によるシンガポールでの中国人大虐殺には言及）、作品世界は日本のアジアへの戦争責任を問うよりも、他国にも自国にも惨事をもたらす戦争自体を問うているとっていいだろう。「地球上のさまざまな場所で、絶えず人間同士の殺し合いがつづいている」ことを登場人物に語らせ、ノーモアという思想を、日本ばかりか世界に向けて発信しているのだ。

それでは次に、作品と関わる戦争被害についてみてみよう。

*学童集団疎開

雪彦たちの学区で実施された学童集団疎開は栃木県的那須方面が疎開先として指定され、昭和19年の夏に上野駅から出発。小学3年生から6年生まで専用列車で移動した（翌年3月からは1・2年生も疎開の対象となる）。東京だけで約22万人、日本全体の都市部だと約40万人の学童が田舎に疎開。縁故疎開も含めれば120万人もの学童が疎開。外地からの引揚げとともに日本人の大移動となった。

「足手まといは残すな」と当時の新聞記事に書かれていたというのが、都市部の子供を比較的安全な田舎に移し、都市の防空態勢を強化するとともに、次なる戦闘要員として育成すべしとの政府方針だったようだ。

米軍は詳細な調査のもとに学校も空爆し（集団疎開後の校舎に日本の軍隊を駐屯させていたから）、爆撃しなかった学校をアメリカ進駐軍が接収したり、焼け出された人々の難民キャンプとなったりした。そうした校舎の中から整理をして、学童疎開の子供たちのために誕生したのが雪彦たちの小学校であった。アメリカの命令で6・3制の義務教育が始まった昭和22年のことである。（敗戦直後の満州では、小学校はソ連軍が接収。以上、作品から）

*「満洲」

1931年に日本は満州事変を勃発させて中国東北部を侵略、翌年には「満洲国」を建国した。川村湊著『満洲国』（現代書館2011・4）には、32年3月1日～1945年8月18日、13年5ヵ月にわたり満洲国が存在し、現在の東北3省（遼寧省、吉林省、黒竜江）に現在内モンゴルのホロンバイル地域などの一部が属す、独立国であったとある。だが、この国家は国民不在で国籍法もなく、そこに住む日本人は日本国籍のままであったという。3000万人といわれる人口はあったが、それは満洲国のスローガン「五族協和」という他民族国家であったことからわかるように、漢民族、満洲民族、日本民族、朝鮮民族、モンゴル民族、その他にもロシア民族、オロチョン族やツングース族などの少数民族、ユダヤ人やアルメニア人などの故地を失った民族などが住んでいて、きわめて多様な人々が暮らしていたからであった。しかし、帝国主義日本が「植民地的占領地」にでっちあげた傀儡国家にすぎず、あくまでも日本が中心で、他の民族は支配され差別を受けていた。

浅田喬二は日本人の満洲移民と満蒙開拓団の実態について、「満洲農業移民と農業・土地問題」中の「日本人満洲移民の軍事的・政治的役割」（『岩波講座 近代日本と植民地3 植民地化と産業化』岩波書店1993・2）で以下のように述べている。

満洲移民は、国策移民として、天皇制国家の侵略目的によって送出されたものである。したがって、日本人移民にかせられた使命は、この国家目的の変化にともなって微妙に変化した。しかし、満洲移民送出の全期間にわたって一貫していえることは、この農業移民が、日

本人を満州で農業経営者として定着させることをねらった「経済移民」ではなく、軍事的・政治的な目的をもって行われた移民であった、ということである。

さらに、「日本人農業移民は、日本帝国主義が満州を植民地的に支配するための人的主軸として送出され」「中国人に対する侵略者・『加害者』としての民族的・階級的支配者」、抑圧者となったと言及している。

又、ハルピンには日本軍 731 部隊があったが、吉開那津子の『消せない記憶』（日中出版 1981・7）は、中国人捕虜らの人体実験で効果を確認し、細菌兵器を実戦で散布した部隊であることを暴露している。2015 年 11 月 8 日号の『赤旗』では、人体実験を行った医師や医学者は戦後、アメリカへ実験データを提供し、それと引き換えにアメリカは東京裁判で戦犯を免責、彼等の多くが医学界に復帰したことを伝えている。

*引揚

外地からの引揚げは、日本の近代以降の侵略戦争、植民地支配の帰結といえる。15 年戦争だけではなく、日清・日露戦争からずっと続いているわけで、その結果の引揚げという惨憺たる事態となった。しかも日本の引揚げの問題は、アメリカとソ連のかけひきの下に分散されるという、まさに世界情勢の中で行われたのである。

敗戦時、外地にいて難民状態になった日本人は 600 万人になったと、本作中に書かれている。満州からの引揚げ船は大連港から出発、日本の博多港に着く。約 120 万人も満州から引揚げ、シベリアに送られた日本兵も加えれば約 190 万人になったという（軍部上層部、企業上層部は先に引揚げ・脱出して、棄民）。

1945 年 8 月 9 日、ヤルタ会談（日ソ中立条約は破棄され、米・英・ソ連による会談）で、ソ連の参戦が承認される。15 日、日本の無条件降伏を大連の日本人たちは知る。敗戦当時、大連には日本人は約 20 万人、中国人は約 60 万人。日本軍が中国人に対して乱暴、殺戮、陵辱を続けてきたにもかかわらず、敗戦当初は中国人は日本人に親切だったが、ソ連軍が進駐してきてソ連兵の略奪、暴行、殺戮が横行、宗主国への怨みから暴行に及ぶ中国人も出てくる。

日本人は難民化し、開拓村では集団自殺を選ぶ人たちも出てきたり、冷え込む大連に押し寄せた難民たちは死ぬ人も多く、死体の山ができたほどだという。生き残り生き延びるために子供たちも売り食いし、港で働くソ連兵やソ連の将校目当てに売春する日本人女性もいたという。自分の首に売り札をぶら下げて街角に立つ難民の子供、ソ連兵に犯され妊娠した女性の海に浮かぶ死体等々。翌年の 4 月からアメリカの支援で引揚げ事業が始まり、最初の引揚げ船が大連港に入ってきたのは同年 12 月だったとあるが、引揚げに至るまでの悲惨な難民状態が、本作品には詳細に語られている。

ソ連軍指令（「米ソ協定」の成立を受けて）による引揚も始まったが、どうにか帰国できたものの、外地で妊娠していた女性は徹底検査を受け、「不法妊娠」とされて強制的に中絶され、数

百体の胎児が始末されたという（上坪隆『水子の譜——引揚孤児と犯された女たちの記録』現代史出版会 1979・8）。

しかし、外地ばかりではない。内地も広島と長崎に原爆が落とされ（日本の敗戦を導くばかりでなく、アメリカは原爆を作るために莫大な費用をかけ、実験をしなければならない羽目になっていた）、空襲により街は焼土と化し、家族が離散・死亡して浮浪児が溢れ、アメリカ軍占領下において「特殊慰安婦施設」が設置され、米兵進駐軍相手の「パンパン」や「オンリー」が続出した。米兵によるレイプ事件も頻繁に起こり、混血児が生まれ、棄てられたり殺されたりしたと、内地での敗戦状況も伝えている。

（2）「葦船、飛んだ」はフェミニズム文学そのもの

このところ「従軍慰安婦」問題が再燃し、最近、「慰安婦」にされた中国の女性のドキュメンタリー映画「太陽がほしい」（中国の班忠義監督）も上映されたが、「葦船、飛んだ」では日本の敗戦時の引揚げにおける性暴力が刻印されている。津島佑子が戦争の記憶で最も描きたかったのが、戦争と性暴力、すなわち女性たちの戦争被害、戦争の傷痕であろう。

作中、「戦争が起これば必ず、孤児が残される。兵士のレイプがつきまとう。女たちは妊娠する。（中略）戦地での兵士と、レイプはどうしても切り離せないのか。女というエサがなければ、兵士は戦場で戦えないというのか。それとも、戦場では死の恐怖といつも隣り合わせだから、兵士の性欲が異常に昂進するというのか。（中略）戦いと性欲は男の本能（中略）そうした『男』を作りあげ、長い間つなげてきたのが、悲しいかな、私たち人間の歴史」なのかと、道子に問わせている。

日本のアジア侵略戦争による「従軍慰安婦」・「慰安婦」問題は日本軍による戦時性暴力だが、ここでは、敗戦の引揚げ時に起きたソ連兵や宗主国に怨みをもつ満州の民による日本女性への性暴力が表出されている。敗戦後日本を占領したアメリカ兵による性暴力は絶えなかったし、沖縄では現在も続いている。第二次世界大戦で降伏したドイツをアメリカ軍とソ連軍が占領した時も同様だったという（シベリアのラーゲリでも頻繁にレイプが起こり、子供が生まれたという）。戦争には性暴力はつきものであり、軍事基地には今なお買春はつきものである。女性は最後の植民地だといわれているが、戦時の性奴隷はまさにその象徴といえよう。女性の普遍的な人権問題に、津島は着眼しているのだ。

この作品はとくに進駐軍のソ連兵による残虐なレイプの他に、妊娠した女性が満州から帰国後ただちに、日本国家によって無理矢理中絶させられるという事実、二重の残虐行為を受けている事実を暴き出している。

しかも、国家による中絶に対峙するように、現代社会において生じたレイプによる産児がたくましく成長した姿や、レイプの被害を受けながらも中絶ではなく出産の道を選ぶ女性を描き

出している。レイプによる産児もかけがえのない命の問題として、捉えている。かつて「山を走る女」で金太郎を産んだ山姥のように子供を産み育てるシングルマザーを山野で駆けめぐる自由さの中で描出したが、津島佑子には産む性とエコロジー思想（本作品でも、満州につながる北の大地の小さな植物をいとおしみ、自然の恵みにまなごしを向ける場面が散見される）を関連させて考えているように思われる。地球破壊に陥り、ようやく地球は無限ではなく有限であることを知らされた現代、フェミニズムが今直面している課題はエコロジーではなかろうか。津島佑子は「葦船、飛んだ」では「山を走る女」よりもっと広い視点から、そのことを世界へ発信しているように思われる。

この本の題名は、中絶された胎児が葦船に乗って空を飛び昇天していく光景を表象しているのではなかろうか。

（3）「ヤマネコ・ドーム」へと継承

「ヤマネコ・ドーム」は「葦船、飛ぶ」を引き継ぎ（道子は、アメリカ進駐軍の兵隊と日本女性との間に生まれた孤児たちのための機関「日米孤児救済合同委員会」の流れをくむボランティア活動をしていた。敗戦後の都会の浮浪児たちや孤児王国、G I ベイビーについても触れている。中絶されこの世に生まれなかった赤ちゃんたちはヒロシくんをリーダーとし、核兵器の部品を盗み出して使いものにならなくさせる秘密の任務があるという幻想場面もあった）、レイプも含めて出産に至った米兵と日本女性の混血孤児たちが施設に引き取られて生き延びたり自死したりする世界を描く。そして、3・11以後もどう生き延びられるのかを思索し、人類の課題と向き合った長編小説だ。原発や原爆等〈核〉製造器と化した日本やアメリカ、世界を問い、警告を発信している。3・11以後に書かれた作品で、早速、原発以後の問題に取り組む。

戦争を問う作品から原発を問う作品へと向かい、津島佑子の思想的径庭、現代社会を撃つ創作行為がうかがえる。欲望の近代文明というものを問うがゆえにエコロジー思想に到達したといえよう。

3. 忘却への抗い——金原ひとみ「持たざる者」・林京子の原爆文学にみる〈核〉の恐怖

（1）日本の現在

「慰安婦」問題も又、記憶の掘り起こし、忘却への抗いそのものである。昨年の暮れ、12月28日に、この問題に関して日韓の安易な妥結が成り立った。アメリカの強圧による米属国同士の急な合意である。10億の拠出金を出すかわりに、「最終的かつ不可逆的」解決と在韩国日本大使館前の平和の碑・「慰安婦」少女像の撤去という日本側の要求を韓国政府は受諾したため、韓国の国民から反対運動が起り、国連の女性差別撤廃委員会からも批判されている現状である。日本

軍によって「慰安婦」にされた女性たちは15ヶ国にも及ぶ。にもかかわらず、敗戦後の東京裁判では、西欧のオランダ以外のアジアの「慰安婦」問題は不問に付されてきたのであった。

韓国の「慰安婦」問題によって『朝日新聞』はマスコミからバッシングを受けたが、『週刊金曜日』2015年9月4日号で、吉田証言を裏付ける公文書が見つかり「官憲による『慰安婦狩り』」が明らかになったことを今田真人が「朝鮮人女性『年間1万人』強制連行の動かぬ証拠」で述べている。又、班忠義監督のドキュメンタリー映画「太陽がほしい」によって、あらためて「慰安婦」にさせられた中国人女性の性奴隷の実態を知らされた。そして、ドイツと違って、日本では戦争責任が徹底して問われてこなかったことを突きつけられた。日本の現在はそれらを忘却して戦争法が通り、沖縄には辺野古米軍基地が新設されようとしている。

又、今年は戦争被害と同じ状況に陥った3・11フクシマ原発事故から5周年になるが、被災地の除染も復興も十分なされないまま、川内原発1・2号機は再稼働し、高浜原発3・4号機も再稼働が始まったが現在運転が差し止めの段階である（送電線の故障のため）。いずれにせよ忘却行為の何ものでもない。だが、世界の核戦争への危機意識はもちろん、日常生活の中での〈核〉への恐怖は強まるばかりである。ここでは、原発及びその原点である原爆について描出した作家の金原ひとみと林京子の文学作品を取り上げたい。

(2) 金原ひとみ「持たざる者」が意味するもの——〈核〉時代における「虚無」

まず、作品に入る前に金原ひとみの生と文学について少し触れておこう。

1983年8月8日、東京生まれ。小学校4年生の時に不登校になり、中学、高校にはほとんど通学せず、文化学院高等過程を中退する。小学6年の時、父親の留学に伴い、1年間サンフランシスコに暮らす。小説を書き始めたのは12歳の時で、15歳の頃リストカットを繰り返す。中学3年生の時に法政大学社会学部教授だった父のゼミに、「めいっ子の高校生」として参加。20歳の時、周囲の勧めで「蛇にピアス」をすばる文学賞に応募し、2003年に受賞、翌年には芥川賞を綿矢りさとともに受賞し、結婚している。さらに翌々年には長女を出産し、「アッシュベイビー」を発表。2005年に「AMEBIC アミーピック」を発表、翌年には書き下ろし長編『オートフィクション』を刊行。翌々年には「ハイドラ」「星へ落ちる」を発表する。2009年に『憂鬱たち』を刊行し、翌年「トリップ・トラップ」で織田作之助賞を受賞。2011年、3・11原発事故が起こり、放射線汚染を心配して東京から父親の実家がある岡山に移住して次女を出産し、その後フランスへ移り住む。2012年、「マザーズ」でドゥマゴ文学賞を受賞、『マリアージュ・マリアージュ』を刊行する。そして、2015年に『持たざる者』を刊行するに至る。以上の経歴から、金原は学校教育からはみ出し、制度の教育にもたれかからない鋭敏な感性を培ってきた作家であることが了解される。代表作の「蛇にピアス」は、刺青など身体を傷つけることによって生の実感を得ようとする若者たちを、力作長編小説「マザーズ」では幼児虐待等育児ノイローゼになる母

たちを、最近作「持たざる者」で原発不安ノイローゼをと、いずれも痛みを描いた作品を産出している。

本題の「持たざる者」は、核時代に生きる不安と虚無を表象化しているが、以下に、私たちの日常を襲う核問題の原発について少々みてみよう。

1979年3月28日にスリーマイル原発事故（原発2号炉メルトダウン）、1986年4月26日にチェルノブイリ原発事故（原子炉暴走事故）が起こり、世界を震撼とさせた。その他にも1957年と1997年（東海再処理工場事故）に爆発事故、1999年に臨界事故など核燃料サイクル事故が起こる。ことにチェルノブイリ事故はヨーロッパを恐怖させ、「持たざる者」でも、夫の赴任先のフランス滞在中に仏人が原発事故によって食品に神経質になっている様子を千鶴は垣間見ている。「チェルノブイリの祈り 未来の物語」を書いたスベトラナ・アレクシェービッチは、2015年にノーベル文学賞を受賞している。

9・11が世界の転換期を象徴する事件だったとすれば、3・11は文明と日本の近現代を根底から問う事故となった。3・11フクシマ原発事故・福島第1原子力発電事故は、2011年3月11日午後2時46分、東北地方太平洋沖地震、東日本大震災による地震動と津波によって、炉心溶解など一連の放射線物質の放出にともない、国際原子力事象評価尺度において最悪のレベル7に評価され、チェルノブイリ以上の災害となった。大気中に放出された放射性物質の量は、ヨウ素131と、それに換算したセシウム137の合計として、約90京ベクトルと推算された。日本国内では、食品・水道水・大気・海水・土壌等から放射性物質が検出された。現場での作業員、自衛隊員、警官の死亡や、避難生活のストレスによる死亡、福島の子供の甲状腺癌の多発（2015年9月30日現在で、疑いも含めて151人）など、内部被曝や関連死が生じている。今なお、避難者は帰宅できず、居住者のいない汚染された地域は放置されている。

このような深刻な状況にあって、現代女性作家は、原発問題を表象化しはじめている。例えばエッセイでは、石牟礼道子・米谷ふみ子・林京子・澤地久枝・津島佑子・落合恵子・高村薫等が書き記している。小説には川上弘美「神様2011」・津島佑子「ヤマネコ・ドーム」・赤坂真理「大津波のあと」・多和田葉子「遣灯使」・金原ひとみ「持たざる者」・桐野夏生「バラカ」等々がある。

本題に入ろう。金原ひとみの「持たざる者」は、『すばる』2015年1月号に掲載、同年4月に集英社から刊行されている。毎日新聞の書評欄で好評を得、同紙の2015年の第1の収穫として文芸評論家たちが挙げている。

上記にみてきた原発被害状況の中、今日の核時代において虚無感を抱えて生きざるをえない人々、虚無を生きる人々の表象化とっていい作品である。Shu, Chi-zu, eri, 朱里の4章から

なり、福島原発事故の当日からそれ以後を4人がどう生き抜いていくか、原発の騷りを受けつつ、原発への対応・考え方などがポリフォニー（多声的言語）的に描かれている。「持たざる者」とは、何も持たないものの意味だろうか。喪失感や虚無感に曝されたものといえようか。産児を守るため岡山に逃れフランスに滞在した金原ならではの作品であり、登場人物それぞれに金原自身の気持や経験を投影させている。

1章では修人を描く。彼は、東京に勤務し東京に住んではいるが、精神的に原発被害に遭った男。ノイローゼ状態となり、原爆によって精神を冒された女性を描く大田洋子の「半人間」を想起させる。いずれも〈核〉によって精神障害に陥った人間たちだ。先にみてきたチェルノブイリや福島原発の事故によっても、修人の不安の深さが了解できる。

彼は広告会社に勤める売れっ子のデザイナーで、一番好きな女性と恋愛結婚して女兒も生まれ幸福の絶頂の時に、福島原発事故が起こる。3・11の日もどうにか自宅マンションに帰りつき妻子の無事を確認するが、原発事故の情報が入るにつれ（子供だけでも避難させると友人や仕事仲間から忠告も入る）妻子を関西に移動させようと、産児や母体・母乳を守るために京都にマンションを購入して母子避難を強要する（妻の気持ちも深く理解せぬ夫・男でもある）。妻は、やっと心身ともに不安定な妊婦から脱出して回復したものの、見知らぬ土地で産児を一人育てる心細さに夫の提案に反対。産児を育てる大変さを知らぬ男の独りよがりな対応に立腹、ついに離婚に至る。妻は結婚とともに専業主婦となり、実家も東京にあった。

修人は娘が原発に冒されないよう、食べ物や子供を外に出すことも拒み、窓という窓を目張りするほど神経をとがらせ、原発ノイローゼとなっていく。湧いてくるほどだった広告デザインのアイデアも浮かばなくなり、仕事も家族も失ってしまって、六本木の豪華なアパートからワンルームマンションに引きこもる「全てを失った」男に変貌してしまう。感受性が強いゆえにいつそう、キノコ類はセシウムを吸収しやすいから気をつけろとか放射能の危険性による強迫観念にずぶずぶに冒されていく。無力感に侵犯され原発不安ノイローゼに陥る。原爆同様、放射能溢れる核の時代の人間崩壊・人間破壊の過程が捉えられているのである（『持たざる者』51～52頁）。

過去の恋人未満セックス友達千鶴から、一時帰国（夫の仕事でフランスからシンガポールに滞在）の知らせを受ける中で、チェルノブイリ汚染によって2年間フランスに滞在していた自分はずでに冒されていること、「そもそも今世界中で流通している食材には、核実験の汚染やチェルノブイリ汚染が残っているものもたくさんあって、そこに福島から放出された放射能が加わっただけと考えれば、今更気にしても仕方がないって気にならない?」「戦争もあった。原爆も落とされた。今も世界中で紛争やテロが起こってる。人間が人間の愚かさによって死んで行くのは今に始まった事じゃないでしょ」（絶えず戦争は起こり、放射能に汚染されている世界に諦めて生きる）と言われる。子育てに懸命な妻の香奈からは「病的だよ、狂ってる」と軽蔑される（香奈は乳児への放射能汚染の不安よりも目の前の子育てが優先。直接育児する妻と外で働く夫の、

それぞれの言い分、齟齬・葛藤がリアルに描出されている）が、原発への対応がポリフォニー的に捉えられている。仕事関係の、子供をもつ女性たちの危機意識と原発に対する前向きな様子（母乳を止めてミルクに代えるとか）も描かれている。

修人は、新しい世界を生き始める時に傍にいてもらいたいと思っていた千鶴からも同意を得られなかったようだが、しかし、千鶴の妹へのメールによれば、どうにかデザイナーの仕事に復帰し始め、生き延びる兆しがみえる。

2章では千鶴を描く。修人に再会し、一夜をともにした千鶴の話だ。夫との婚約中、夫の転勤で渡仏する直前、修人と二度ほどセックスする関係となり（修人はその半年後に結婚）、千鶴は惹かれる。ずっと優等生として生きて来た彼女は婚約者を裏切れず、仕事も辞めて結婚し、フランスで夫の子供を産む。悪阻のひどい妊娠生活等、悪条件の時には、修人を想い、「記憶に救われて」生きてきた。それがシンガポールで子供を脳性で亡くし、「世界が変わったって思」いに陥り、虚無的な心情の中に漂ってきた（子供喪失ノイローゼ）。修人も又、震災で「世界が変わったと思」い、虚無に陥る。同じような心境の中で肌を重ねる二人ではあったが、子供の遺骨のあるシンガポールへ千鶴は帰ったようだ。ひょっとしたら、再会の逢瀬によって修人の子を身籠もったかも知れない。避妊具のないセックスだったので、いずれにせよ千鶴は優等生なので、規範を破る生き方はできなかったのかも知れないが。

3章はエリナを描く。彼女は千鶴の妹。姉には自由奔放と思われるだけあって（作者の分身に近い）、高校卒業前後に、かなり年上の男性と結婚して子供を産み離婚。再婚したが又離婚して東京在住だったが、福島原発事故から母子避難して沖縄へ。さらにアメリカにいる子供の父親の手助けでイギリスに避難する。物に溢れ変化が激しい日本とは違って、質素に保守的で伝統を守り変化なく着実に生きるイギリスのロンドンで、言葉も満足に通じず異なる文化の不自由さの中でシングルマザーとして生きる。就労ビザを持たないので働くこともできず、元夫たちの仕送りで何とか生活も出来ている。だが、日本より落ち着いて子育てできるし、アメリカでのシングルマザー生活より危険が少ないとも感じている。外地への避難は苛立ちと不安の手探り状態で孤独感もつきまとう漂流生活だが、ようやく娘にも自分にも友達ができ（離婚を考えているママ友から同性愛的感情も抱かれる）、ベルギー人でパレリーナ修業中の若い男性に出会って恋人となる（娘に親離れ現象が生じ、その寂しさを若い恋人が埋めてくれる）。やがて、その若者がアメリカのパレー団に抜擢されたため、娘を連れて、彼とともに渡米する。虚無感に行き着いた姉とは違って、規範を破って生きる妹にはひとときの充実感を与えている。が、自由と背中合わせの孤独感、デラシネ（根無し草）の人も又、虚無感と紙一重かも知れぬ。

4章は朱里を描く。彼女は、ロンドン滞在中のエリナのママ友の一人。海外に駐在する日本の企業マンの妻。典型的な専業主婦。原発事故による放射能を心配してイギリス行きは良かったと叔父には言われたが、朱里にとってイギリス滞在は過酷なものだった。外地生活に慣れず、家に

籠もって日本のテレビを観、日本の手料理ばかり作り、英語にもイギリス文化にも馴れないまま日本を恋しがっていたが、義父の介護とはいえ、ようやく夢はかなって、夫より一足早く娘とともに帰国できることになる。しかし、ローンで立てたマイホームには、義兄夫婦が住み込んでのっつけられそうな状態となり、イギリス生活を逆に懐かしく思うほど不幸感に悩まされ、やはり虚無感を抱いている。娘もいじめっ子になるほど、母子ともに交友関係、帰国生活に馴染めない。しかし、義兄夫婦も家を出ていくことになり、「完璧な幸福」感に包まれる。忍び寄る原発の危機感もなく日常性に埋没している一般の主婦感覚にこそ恐ろしさがあることを作者は見詰めているようだ（根岸泰子は「女性作家のフクシマ—津島佑子『ヤマネコ・ドーム』と金原ひとみ『持たざる者』—」（『社会文学』2016・2）で、4章が最も良いと指摘）。1章の原発ノイローゼになる男と、4章における現在の日常性にだけ埋没している女を対照的に表出していて、現代日本の恐ろしいばかりの光景を捉えている。

「持たざる者」は、4人それぞれを通して、時には薄氷を踏むような幸福・充実感に満たされたとしても、孤独で不安、虚無感を抱えて生きざるえない今日の核時代の人間存在を表出しているといえよう。核時代をこのようなかたちで撃ち、核社会への異議、批判の書となっている。

（3）林京子の原爆文学——忘却への抗い

林京子についてはあまりにも知られている作家だが、原爆文学を書き続けたことの意味が経歴を辿ることで鮮明になるので、やはり触れておこう。

1930年8月28日に長崎市に生まれる。翌年、父の転勤で上海市に移住するが、37年に日中戦争のため長崎に一時帰国、小学校1年生の時だった。43年に上海の女学校に入学するが、45年3月に父を残して帰国し長崎高等女学校に入学。母と姉妹は諫早に疎開し、長崎市内に一人で下宿する。8月9日、勤労働員先の三菱長崎兵器製作所大橋工場で被爆、12日に母に迎えられ諫早に徒歩で帰る。47年に女学校卒業後、長崎医大附属厚生女学部専科に進学するが間もなく退学し、51年には上京して結婚。翌々年には男児を出産するが、喜びとともに原爆の遺伝を怖れる日々となったという。62年に同人雑誌『文芸首都』に加わり、「閃光の夏」「その時」「曇り日の行進」を発表。74年に離婚し、翌年「祭りの場」で『群像』新人賞・芥川賞を受賞する。78年、短編連作集『ギャマン ビードロ』が芸術選奨新人賞の内示を受けたが謝絶。80年に上海を舞台にした作品集『ミッシェルの口紅』、翌年『無きが如き』とエッセイ集『自然を恋う』を刊行。82年「核戦争の危機を訴える文学者の声明」に賛同して署名、翌年には『上海』で女流文学賞、翌々年に父を中心とした作品集『三界の家』で川端康成文学賞を受賞する。85年に作品集『道』を刊行、子息のワシントン駐在に同行して渡米。翌々年に作品集『谷間』・エッセイ集『ヴァージニアの蒼い空』を刊行し、帰国する。90年に『やすらかに今はねむり給え』で谷崎潤一郎賞を受賞、翌年エッセイ集『瞬間の記憶』を刊行。2000年『長い時間をかけた人間の経験』で野間

文芸賞、2006年「その全集に至る文学的功績」を評価されて2005年度朝日賞を受賞する。

被爆、上海時代、結婚・出産・離婚、両親のこと等、どの作品を読んでも痛みをとまなわないものはない。ことに原爆に関して、惨事を体験した者のみが書きえる作品を産出。フィクションにすることを厳しく排して「新聞記事」のように書く方法を選択（魯迅の影響もあると、姜東星は指摘）。長崎の女学生時代の被爆がトラウマの原点となる。又、故郷と思っていた上海（商社マンだった父の仕事の関係で在住）が日本の半植民地だった事実を知るにつれ、被害と同時に加害の現実を知り、思考は複雑に深まっていく（「上海」等々）。

①忘却への抗いからの出発

第二次世界大戦末期の1945年8月9日11時2分に、アメリカ軍によって長崎市に原子爆弾が投下された。広島に継ぎ実戦で使われた人類史上2発目の核兵器である。原爆搭載機ボックスカーにより投下された長崎原爆は、プルトニウム239であった。この一発の兵器により、当時の長崎市の人口24万人（推定）のうち約7万4千人が死亡、建物は約36%が全焼または全半壊したという。

2015年8月17日の『毎日新聞』に、「創作入る余地ない非道」という見出しで、林京子のインタビュー記事が載っている。文壇デビュー作となり「原爆作家」として出発した「祭りの場」の創作動機と創作方法についてである。「国家も思想もなく、日常をはぎ取った根っこの命を、死んでいった動員学徒たちの追悼として書いてきました」と書き続ける理由を語っている。被爆しながら逃げ延びる道で「性別も分からないほど焼けた人から『薬ば（薬をください）』って言われた。私には人間の感情なんてありませんでした」。だから文体に一切の感傷がない、涙も哀れみも拒否し、「目指したのは新聞記事」であり、事実を淡々とブロックを積み上げるように書き、「創作はありません。だって、そういうことが入る余地がない、非道な8月6日と9日なんですよ」という。言葉の多様さも排した。「政治家たちがやりますでしょ。七色にも八色にも取れる言葉」ではなく、熟語は全て国語辞典を引き、それ以上分解できない簡潔な語を選んだという。「言葉の意味は一つです。6日と9日はそれしかない」と。人類そのものへの許し難い犯罪を、体験や感情を押しつけずに刻みつけていく方法を貫き通してきた。

執筆のきっかけは、米側の原爆記録映画の「かくて破壊は終わりました」というセリフだった。「9日だけの痛いかゆいで終わっていたら書かない。でも、長崎の友人たちの体内で放射線が出続けている。どんどん亡くなっていたんです。書こうと思いました」。自身も母親で息子が鼻血を出せば、本当は抱きしめるべきだったのに、「原爆症」ではないかと心配するあまり「なんで転ぶの」と叱りつけてしまう日々だったという。林京子にとって、2011年の福島原発事故は一般とは別の意味で衝撃的だった。「被爆国として、日本人には核物質の知識があると私は思っていたんです。原爆も原発もイコールですから。ところが天変地異のごとく大騒ぎでしょ。あぜん

としましたね……。問題は命と子どもです。福島の人たちには生涯にわたる支援をしてあげてほしい」と。

なお、この記事には、「祭りの場」で書かれている、女学校時代に動員された工場の風紀は乱れに乱れ、皇国は遠い存在で、大人の男たちの劣情に満ちた目と手にさらされたことにも触れている。

忘却への抗いとして林京子の原爆文学が出発したことを物語る記事である。林京子の文学行為の真髄といえよう。

②怒りと絶望の文学

林京子は文字通り原爆の語り部である。さまざまな被爆光景を刻む。

まず、原爆について。

「祭りの場」は『群像』1975年6月号に発表。1945年8月9日午前11時2分に長崎に原子爆弾（プルトニウム爆弾）が投下され、学徒動員された男女の生徒が爆死したり、被爆しながら逃げ延びる光景を描出した。被爆の惨状の実態を伝える。「祭りの場」とは、直接には出陣する学徒たちが踊りを踊る広場を指し、出陣の祝祭と慰霊の祭壇を意味する（姜東星の指摘）。踊る学徒たちは被爆して即死した。被爆前、学徒動員された女学生が工場でセクハラを受けそうになる場面も描写している。

「空罐」は『群像』1977年3月号に発表。少女が爆死した両親の遺骨を空罐に入れて学校に通い、教室の机の上に置くという痛切な短編である。骨壺ならぬ、敗戦後のアメリカ占領軍を象徴するような空罐に遺骨を入れている光景に、哀切さと皮肉が込められ、読者にいっそうの痛みと原爆への怒りを抱かせる。

「ギャマン・ビードロ」は『群像』1977年5月号に発表。旧家の屋敷の倉に収納されていたギャマン・ビードロまで被爆して輝が入ったことを通して、人間も建物も陶器も、ことごとく原爆によって破壊される惨状を伝える。

「トリニティからトリニティへ」は『群像』2000年9月号に発表。アメリカの原爆実験場トリニティ・サイト（ニューメキシコにある）、「グラント・ゼロ」を訪ねた時の記録である。大地の被爆を見て『トリニティ・サイト』に立つこの時まで、私は、地上で最初に核の被害を受けたのは、私たち人間だと思っていた。そうではなかった。被爆者の先輩が、ここにいた。泣くことも叫ぶこともできないで、ここにいた」ことを発見する。人間より先に大地が傷ついていたという発見。泣くことも叫ぶことも出来ずに、人間の果てしない欲望の犠牲者になっていたことを知る。生物が萌え出る大地まで核に侵犯される事実を突きつけられ、地球自体の危機感を抱いたであろう。原爆への根底的な恐怖と怒りを新たに、核への根源的な問いは深まる。環境問題、エコロジーにつながる痛烈な体験となる。

「希望」は『群像』2004年7月号に発表。二次的「被爆者」（直接被爆者ではなく、被爆した父親の遺骨を焼け跡から抱いて帰る）の新妻が、「被爆二世」といわれるかも知れぬ新しい命を産むか否か逡巡し、産むことを決意するまでを描出。女性の身体に及ぶ被爆の翳りを、いつまでも続く不安・恐怖・苦悩として描出している。「希望」と題されているが、アイロニーも込められているのではないかと、姜東星は指摘。

原発について描出した「収穫」は『群像』2002年1月号に発表。臨界事故（東海村）によって核燃料・放射能が漏れて環境汚染の調査が始まり農民たちは検査を受け、収穫物は処分しなければならぬのかと不安に陥る農村と農夫を描く。福島原発事故が起きる前に既にこの短編を書いて警告を発している。「収穫」というタイトルこそアイロニーが込められ、収穫への不安が凝視されている。

〈核〉そのものの恐怖について語る「長い時間をかけた人間の経験」は、『群像』1999年10月号に発表。札所巡り・お遍路から始まる被爆した友人たちの回想と当時の作者の〈核〉をめぐる所感である。執筆時点までの、反核思想の総決算。この時点であらたな地平に到達できそうであったが、3・11の原発事故により、被爆体験を学習できない人間存在に絶望と怒りを抱き直す。

人間ばかりか大地も物もすべて被爆する光景を凝視し、核の恐怖を伝えるとともに、原爆・原発を忘却しようとする現代社会を怒りを込めて告発している。

③石牟礼道子・大田洋子との比較

石牟礼は水俣病当事者ではないということもあるが、大地・自然・故郷に根ざしているため、母性・山姥的側面・自在さがある。比べて林京子は大地・自然も原爆により傷ついている（人間より先に核実験により傷つく）ことを知り、故郷喪失者（半植民地・占領下の上海で少女時代を過ごし、故郷と思っていた上海を故郷と思えないデラシネの人）のため居場所のない宙吊り状態である。大地・自然・母性への信頼・山姥的自在さをもてない。したがって絶望と背中合わせの怒りの宙吊り状態が永続。大田洋子のような虚無感にも陥ることができない。大田と違って、女性の身体（生理・結婚・出産・子育ての不安がつきまとう）に及ぼす原爆も見据えている。虚無につきまとう退廃を拒絶し、凜とした闘いの文学といえる。生涯、核の惨状を伝え、被爆した人々を弔う言動を続ける。

④世界に発信する原爆文学

林京子は核時代を根底から問う。1945年の原爆投下からずっと、核の不安に曝されている日本、世界を問い続けてきた文学である。ノーベル平和賞・ノーベル文学賞に値する作家だ。

原爆・原発ともに、核による地球破壊、環境・エコロジー問題そのものであり、金原ひとみも

林京子も現代の最先端の深刻な課題を提示している。3・11 以後のフェミニズムのあり方とも重なる。

核問題の探究を通して、人間存在の根本を問いただし、生き物すべての命を産み育む地球存在そのものの意義の再発見を、私たちに促している。

戦後 70 年の節目を迎え、再びアジアにおける戦争、世界戦争の危機に見舞われる今日、林京子の文学はことに原爆・半植民地問題を通して戦争を問い続けた、今こそ読み直さなければならぬ必読文学といえよう。

